

「ユニセフ子ども物語」

地球に住む子どもの
いろいろなくらしを知ろう



NEPAL

ネパール



水牛の背中を 机にして

ここはネパールの東部の小さな村です。村のはずれに藁と木の枝でできた小さな小屋がポツンと建っています。大風が吹くとアッという間に倒れてしまう頼りないものですが、これはこの村の未来をつくる学校なのです。

学校には28人の、年齢もさまざまな子どもたちが、かたい土の上に薄いござをしき、何人かで一緒に一つの教科書をのぞきこみながら座っています。年は違っていても学年は一つです。学校は朝の6時30分からの2時間。9ヵ月通って卒業すると、普通の小学校2年生と同じ学力がついたことになるのです。

ウルミラ（11歳）とシャンティ（7歳）の姉妹もこの学校で勉強しています。

朝日と同時に起きだして学校に行くまでにすることは

1. 床掃除（ほうきではいたあと雑巾でふく）



2. たき木集め



3. 火を起こして朝食作り



4. 皿洗い

学校が終わってからすることは

1. 水汲み（往復2～3時間の山道に行く）



2. たき木集め（同上）



3. 草刈り



4. 水牛と牛の世話

2人の1日は
とっても
ハード!!

そして日が暮れることにはヘトヘトになってしまいます。でもこのような毎日を送っているのはウルミラとシャンティだけではありません。村の女の子はみんな同じように家の仕事を手伝っています。家事の手伝いで忙しくて宿題をする暇がない女の子にくらべると、男の子の方が勉強がよくできます。

でもウルミラもシャンティも本当は勉強が大好き。そこで思いついたのが、水牛の背中。牛たち家畜の番をする間、大きな水牛の背中にまたがって教科書を読むのです。ウルミラの夢は先生になること。男の子なら夢を実現するのは女の子よりたやすいかも知れません。ユニセフはネパール政府と協力してとくに女の子の教育に力をいれています。ウルミラの通う藁小屋の学校もその一つなのです。

（Susanne Neertoftの記事より抜粋要約）



ネパールについて

面積	14万797km ² (日本の約37%)	
人口	1892万人 (日本の約15%)	
産業	ヒマラヤ山脈の南面の山地(北部) だんだん畑にトウモロコシ・大麦を栽培、 水牛・牛・ヤギの放牧 平野部(南部) 稲・ジャウト・サトウキビなどを栽培	
言語・宗教・習慣	北部	チベット=ビルマ語系の言語 ヒンズー教・仏教(チベット仏教)ほか 非ヒンズー教徒は肉食もし(羊・ヤギ・ 水牛・鶏など)トウモロコシ・アワ・ヒ エなどからつくったお酒も飲む
	南部	ネパール語(インド=ヨーロッパ語系) ヒンズー教、カースト制度がある。高 いカーストのヒンズー教徒の多くは菜 食主義 ヒンズー教徒にとっては飲酒は罪悪

しかし肉は高価
なので、ふだん
の食事は米と豆
と野菜が中心。
たんばく質は豆
とミルクからと
ります。

世界には学校に行けない子どもたちが約1億人、
また、はたらく子どもたちが約1億人いると推定さ
れていますが、ネパールの首都カトマンズのカーペ
ット工場などでも、多くの子どもたちが早朝から夜
遅くまで過酷な条件で働いています。山間の貧しい
村から、一時金と甘い言葉でだまされるようにして
連れてこられた子どもたちです。

貧しい家庭にとって子どもを学校にやるのは大変
な負担ですが、子どもが少しでもよい未来を選択で
きるためには読み書き、計算、そして生きるための
知識を得られる教育が必要です。さらに女の子が教
育を受けることは次の世代のためにも重要です。

ユニセフでは女の教員を養成したり、夜や早朝に
学校を開いたり、母親が収入を得られるようにした
りして、なんとか女の子も教育を受けられるように
支援しています。

■ネパールのごはん

ネパールの人たちの代表的
な食事はダルカリとよばれる
ものです。ごはんの上に
豆を煮込んだスープをかけ
て手で混ぜながら食べます。
日本のカレーと比べると味
がないように感じます。ご
はんは水分が少なく、ネパ
ールの人たちと同じように
手で上手に食べるのは思っ
たよりも難しいのです。



■ネパールと日本と

1994年	ネパール		日本	
	女	男	女	男
識字率	13%	38%	99%	99%
小学校就学率	41%	80%	100%	100%
5歳未満児死亡率 <small>(同じ年に生まれた子ども1000人 のうち5歳の誕生日を迎える前に 死ぬ子どもの数)</small>	128		6	
一人当たりのGNP	170米ドル		28190米ドル	

(ユニセフ世界子供白書1995年度版より)

しかし小作農は、重い小作料を地主に納めなければならな
かったので、生活が苦しく、家計をおぎなうため、わずかな給
金を前借りして、娘を製糸工場や紡績工場で働かせたりした。
一方、地主は小作人のつくった米の半分近くを小作料として
取った。地主は村の有力者で、府県会や国会の議員になる者
もあり、資本家とともに、国の政治の上に大きな力を持った。
労働者の状態 農村で生活できない者は、都市に出て労働者
になった。製糸業や紡績業の女子労働者は寄宿舎に入れられ、
外出も自由にできなかった。そして労働時間は長く、賃金は
低かった。

「解放令」後も社会的・経済的に差別された部落の人々の生活はひどく、幼い子
どもが就学できずに、危険の多い不健康な都市周辺のマッチ工場などで働いた。
また都市の不安定な雑業や炭鉱の労働条件の悪い職場で働く人々もいた。
(* 日本書籍「中学社会」平成7年度より)

これはネパールではなく、日本の明治時代の社会状況で
す。今から約100年前(ちょうど『きんさんぎんさん』
が生まれた頃)日本の就学率は今のネパールと同じくら
いでした。その頃は、小学校4年間が義務教育といっ
ても授業料は親の負担であり、貧しい家庭では子どもが学
校に行くことができませんでした。

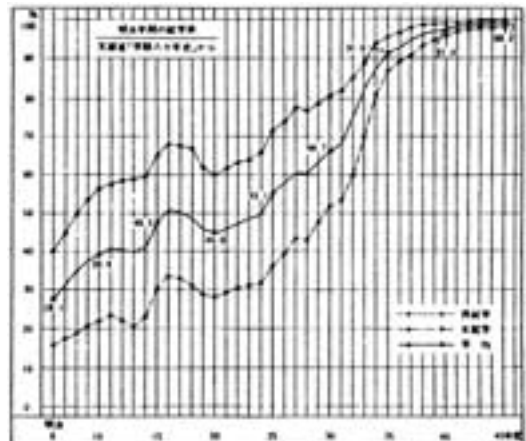
現在日本は、小学校就学率100%、識字率99%ですが

日本語教育が必要な外国人児童・生徒は10450人
('93年文部省調べ)

夜間中学に通う生徒は2965人

(全国夜間中学校研究会調べ'93年9月現在)います。

* (参考)日本の就学率の推移(明治時代)



明治時代の男女就学率表

グラフ：唐澤富太郎「図説 近代百年の教育」